

## 北方少数民族の本

日本の場合、エスキモー（イヌイット）の人たちのイメージを作り上げたのは、本多勝一氏の「カナダ・エスキモー」という本ではないでしょうか。

氷の家に住み（実際は圧雪された雪で作られた家です）、獲物の肉を解体しながら食べ。自分の記憶も小学生向けの学習雑誌の付録についていた、世界の民族（アフリカ、アジア、離島の人々）を特集した冊子の中で、北極にはこんな人たちがいるという、この本からの抜粋記事が最初の出会いでした。

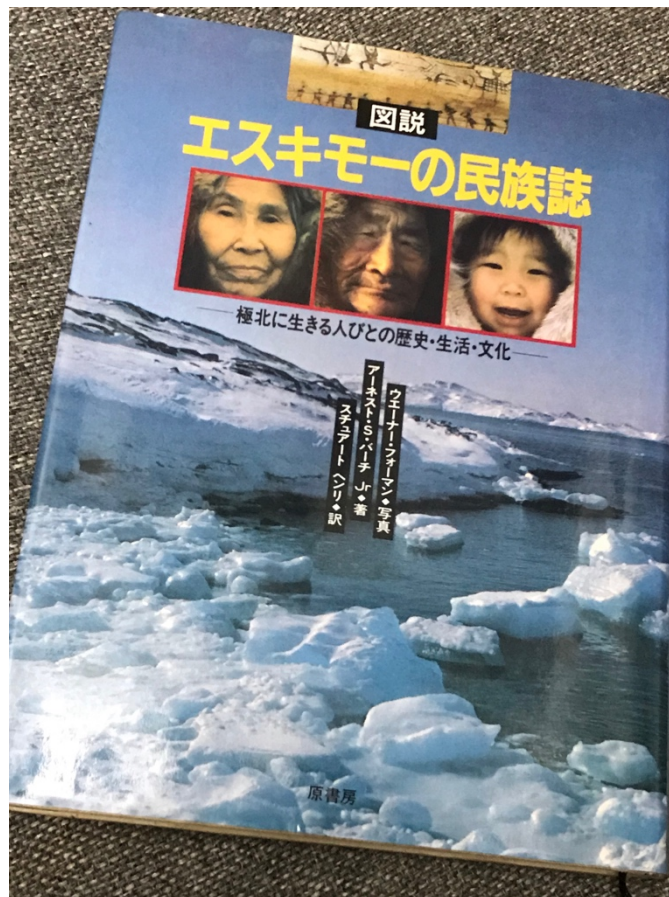
本多氏の取材当時、彼らはまだ定住をしておらず、家族単位で狩猟をしながら暮らしていました。しかし、それから間もなく、カナダ政府の方針で定住化が進み、あの本のような狩猟中心の暮らしをしている人たちはいなくなってしまいました。

その本を読んだ当時は、酷寒の地で狩猟をしながらイグルーで生活する人たちに憧れたものです。ただ、それはもう、叶わない夢です。我々日本人の暮らしでさえ、この50年で激変しているのに、エスキモーの人たちの暮らしだけ変わらない、ということはないのです。世界が激変したおかげで、憧れの北極の人たちと時間差なしで話ができるようになったのは、ありがたいことです。

ところで、エスキモーの人たちについて詳しく知りたいと思っても、極端に古い情報か、SNSで本人たちが書き込んでいる今現在の情報しか手に入らないのではないのでしょうか。

彼らの文化、生活、歴史について、端的にまとめて書かれた書籍は、あまりないのも事実です。そんな中で、個人的にお勧めできるエスキモーの本と言ったら、この本でしょう。

「図説 エスキモーの民族誌—極北に生きる人びとの歴史・生活・文化（原書房 1991/11）」



30年も前の本で、絶版になって久しいですが、今も古本で手に入りますし、あちこちの図書館にも置いてあるので、機会があれば、ぜひ読んでみてください。日本で手に入って、エスキモーの歴史や文化について、一般の人たちにもわかりやすく、詳しく書かれた本は、これしかないのではないかと思います。

翻訳をしたスチュアートヘンリ（日本名「本多俊和」）氏は、日本における北方民族研究の第一人者です。

初めて読んだ時、ページをめくるたびに飛び込んでくる新しい情報に心を躍らせていた頃を思い出しながら、改めて

ページを繰ってみると、自分にとっては親しみある土地の名前がいくつも登場し、見たことのある道具の写真が登場し、すっかり忘れていた昔話が、あの町の話だったのかと、改めて心踊っている次第です。

文責：高沢進吾

※今回はあえて「エスキモー」と記述しています。